

旧白川街道

20 世紀初頭まで、旧白川街道は、白川をはじめとする庄川流域の主要道路であり、飛騨国（現岐阜県北部）の首都であり行政中心地でもあった高山と越中国（現富山県）を結んでいた。

道自体は中世から存在していたと考えられているが、正式に整備したのは高山城主の金森長近（1524～1608）である。長近は、この道を利用して領地の支配力を強めようとし、特に白川の照蓮寺などの浄土真宗の有力寺院を支配しようとした。浄土真宗の信者は、日本の各地で国司や大名に反抗していたが、特に日本海側の地方で成功していた。

白川街道が栄えたのは、江戸時代（1603～1867 年）の平和な時代で、徳川幕府が権力を主張し、商業を促進するために各地に主要な道路を整備していたころである。しかし、20 世紀に入ると、近代的な道路が整備され、旧街道は徐々に廃れていった。今では、白川村の南部にある平瀬という集落にその一部が当時のまま残っているだけだ。常德寺から北へ向かう途中の平瀬では、舗装された昔ながらの道が畑の中を通っている。